

オマーン

—シンドバッドゆかりの地をたずねて

三菱UFJ リサーチ&コンサルティング
国際研究室
橋本 和子



オマーンという国名を聞いて、具体的な地名や文化・社会をイメージできる人は少ないのではないのでしょうか。オマーンは湾岸諸国の一つですが、金融や商業の中心地であるアラブ首長国連邦や、メッカを擁するサウジアラビアと異なり、オマーンと聞いてピンとこない人も多いのではないのでしょうか。ペルシャ湾の入り口に位置するオマーンはアラビア海の通路として昔から栄え、アラビアンナイトに登場するシンドバッドはオマーンの港から旅立ったと言われています。

筆者は、2017年5月にオマーンにフィールドワークのために渡航しましたが、現地で見聞したことを踏まえて、オマーンという国を紹介したいと思います。

安定の絶対君主制国家 オマーン

オマーン国は、アラビア半島の東端に位置し、アラブ首長国連邦（UAE）、サウジアラビア、イエメンと国境を接しています。面積は約30万9千500平方キロメートル（日本の約85%）、人口は約442万人の国¹であり、アラブ人（オマーン国籍）のほか、インド人、パキスタン人、バングラデシュ人などの外国人労働者が暮らしています。

現国王は、カブース・ビン・サイード国王で、1970年から半世紀近くの間王位に就き、かなりの長期政権となっています。カブース国王は、それまでの国王の鎖国政策の転換を図り、石油収入を基盤とした経済建設、国内宥和を推進してきました。

国王は、非同盟中立を標榜しつつ全方位・善隣外交を行い、アラブ地域のいざこざからは距離を置いた統治を行ってきました。毎年定期的に国内を巡幸し、各地の部族や有力者との対話を行っています。この巡幸は、各地の有力者にとって国王と直談判できる貴重な機会となっています。国王はこれに対して解決策を提示するとともに、先々で国王のポケットマネー（現金）を給付することが、恒例のイベントとなっています。中東では、政治や社会を動かすキーワードとして、しばしば「政治家」や「官僚」よりも「部族」が重要な意味を持っており、一部族を代表する国王が、国内の各地の部族とのパワーバランスに配慮ながら国家を統治しています。この関係は、アラブ



オマーン地図（出所：外務省）



オマーンのラクダ。アフリカやアラビア半島のラクダはひとこぶ。ふたこぶのラクダは中央アジア産であることが多い。（写真：筆者）

¹ 外務省ウェブサイト：<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/oman/data.html#section1>（2018年4月4日アクセス）

地域ではよくみられる典型的な「パトロン・クライアント関係」(パトロンはクライアントに対し、生活全般の保障や保護・恩恵を配分する代わりに、従属や支持・協力を得るといふもの) に基づいたものです。2010年の冬に発生したアラブの春の騒乱においても、体制が危ぶまれる事態に至ることなく、安定した基盤を築いています。

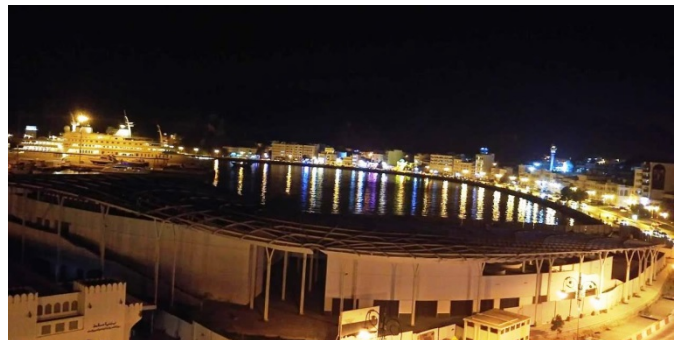
その一方で、現在 77 歳という高齢期を迎えた国王の後継者問題がオマーンの潜在的なリスクと言えます。国王には、兄弟・子どもがおらず、現時点でだれが次期国王となるのか決まっています。オマーン基本法第 5 条²では、王家は国王の座が不在となつてから 3 日以内に新国王を選出することを規定しています。また基本法は、仮に王家評議会が合意に達することができない場合、後継者名の書かれたカブース国王の遺言書が開封されることとなっています³。



国王が建立したスルタン・カブース・モスクの天井 (写真：筆者)

アラブの春では、チュニジアやエジプト、シリアなどで著しい体制の転換がみられましたが、湾岸諸国においてその影響は限定的⁴でした。オマーンは、他の湾岸諸国同様に経済的な果実を分配 (バラマキ) することで、国民の不満を解消してきました。アラブの春でも、失業対策や最低賃金の引き上げなどの政策を行わざるをえず、これにより財政負担が増加しています。

しかし、カリスマ性を有するカブース国王であっても、政治運営は容易ではありません。当然、次期国王もカブース国王同様の、強いリーダーシップが求められるでしょう。カブース国王は、財務相、国防相、外相に中央銀行総裁も務めるなど、湾岸諸国の王室と比べても極めて多くのポストを兼任しています。これほどの権限を手中に収めている国王の交代にあたり一切の助走期間も無く、次期国王がリーダーシップを発揮することは、大変厳しいものがあります。



オマーン的首都マスカットの夜景 (写真：筆者)

カブース国王は、1976 年から、「石油への強い依存を軽減するために非石油分野の工業化を進め、経済の多角化をはかり、民間部門の投資を強化する」ことを目指していたようです⁵。これには、石油の確認埋蔵量が少ないという、オマーン特有の事情がありました。カブース国王が高齢である現在、その意味するところはますます重要になってきています。オマーンの原油可採年数は、わずか 15 年程度と推定されており、早期に石油中心のモノカルチャー経済からの転換が求められています。

² WIPO ウェブサイト、<http://www.wipo.int/edocs/lexdocs/laws/en/om/om019en.pdf>

³ ただし、国王はしばしば遺言書を書き換えているという噂もあるようです (出所：公益財団法人国際通貨研究所 (2014)「オマーンの現状と課題～脱石油ガス依存に向けた課題～」)。これが後継者をめぐる懸念に拍車がかかる要因の一つになっているのかもしれない。

⁴ 同じアラビア半島の中では、イエメンのみ体制が崩壊しましたが、イエメンは産油国ではなく、湾岸協力理事会 (GCC) の構成員でもありません。

⁵ 松尾昌樹 (編) (2018)「オマーンを知るための 55 章」明石書店 p.180

オマーン国民と外国人労働者

オマーンの一人当たり GDP は 17,660 ドルです（日本の一人当たり GDP は、40,060 ドル⁶）。一見すると日本が圧倒的に高いように見えますが、湾岸諸国を一人当たり GDP という観点からで見ると、気を付けるべきことがあります。湾岸諸国には、南アジアや東南アジアからの低賃金の外国人労働者が多く働いています。一人当たり GDP はこれらの労働者を含めた人口で GDP 総額を除いており、自国民だけで見ると、実際には統計で見る数字以上に高い所得、生活水準にあると言えます。オマーンの場合、国内の人口の約半数が外国人労働者です。外国人労働者は、ごく一部の高給取りを除き多くは低賃金労働者であり、短期契約を更新しながら働いています。

一見裕福に見えるオマーン人ですが、若年人口の割合が非常に高く、失業率は近年 15%から 20%の間を推移しており、若年層の雇用は深刻な問題と言えます。条件の良い公務員の職は狭き門となり、民間部門の雇用を広めていくために、政府は一部の業種にオマーン人化（オマニゼーション）の規制を設けるようになりました。

こうした自国民の雇用を優先させる政策を推進するトレンドは、オマーンに限らずサウジアラビアや UAE など広く湾岸諸国で見られる現象です。若年層の人口増加に直面する湾岸諸国では、それまで外国人が担っていた業務を、自国民に置き換えていく方針を採用していますが、外国人の給与水準とは何倍も（場合によっては何十倍も）開きがあるので、オイルマネーに支えられて何不自由なく育ってきた若者が、なかなか定着しないのが現実のようです。

湾岸諸国でよくみられる自国民と外国人の関係ですが、彼らの動線は全く交わらず、また、同じ空間に居ても、同じ目線に立たず、視線すら交わさない関係と言えます。使う側と使われる側、立場の優位・劣位が明らかであり、そこにコミュニケーションや共感が生まれるような関係に至らないのが特徴です。平たく言えば、「外国人労働者は取り換えの利く存在」という扱いです。

残念ながらこの点はオマーンにおいてもほぼ同様であり、外国人労働者とオマーン人のコミュニティははっきりと分かれています。オマーン南部の都市サララを訪れた際に、空き地で大きなテントを張って盛大に結婚式が開かれており、筆者も飛び入りで参加させてもらったのですが、出席者はほぼ全員オマーン人でした。

しかし、オマーンに来て意外だったのは、タクシードライバーの仕事がオマーン人の仕事であることです。先の結婚式への飛び入り参加も、ドライバーがオマーン人だから参加させてもらえたという事情がありました。他の湾岸諸国では、自国民がタクシードライバーに従事することはまずありません。初めてタクシーに乗った際に、オマーンの民族衣装を着たドライバーが意外だったので、「あなたはオマーン人ですか？」と聞くと、「オマーン人でないと、この仕事には就けないのさ」と強気の返事をするのでした。乗り合いタクシーのオマーン人ドライバーが、フィリピン人やインドネシア人、インド人の乗客を運ぶという光景や、客待ちしているタクシードライバーが、付近のカフェでくつろぎながら、店員と雑談を交わす、という光景も湾岸ではオマーンならではの光景です。この辺りの事情は、他の湾岸諸国と比べ、石油収入の増加に伴うオマーン人の生活・意識の変化が緩やかであったからなのかもしれません。考えてみれば、もともとアラブ人は、ホワイトカラーからブルーカラーまで多様な職業に就き、概しておしゃべり好きで、おせっかいな商人気質で、国籍問わず話しかけてくる人が多いのが特徴です。この意味で、オマーンの方が、石油で生活が激変する前のアラブ人らしさを残しているののかもしれません。

⁶ IMF (2017) Economic Outlook, <https://www.imf.org/external/datamapper/NGDPDPC@WEO/OEMDC/ADVEC/WEOWORLD>

オマーンは、観光地としてはあまり知られていないもののすぐれた世界遺産も多く、豊かな自然と長い歴史を有する見どころのある国です。また、治安も日本並みかそれ以上に良いと言われており、筆者としてはおすすめの国です。ぜひ、訪問されてはいかがでしょうか。



青果市場の労働者（出所：筆者）



農村部のヤギ飼い（出所：筆者）



スルタン・カブースモスクの外観（出所：筆者）



世界遺産のバハラ城塞（出所：筆者）

<執筆略歴>

- 1996年 京都女子大学東洋史学部卒業
- 1997年 アンカラ大学トルコ語上級ディプロマ取得
- 2001年 ロンドン大学大学院東洋アフリカ学院地域研究学部中東研究科修了
- 2003年 財団法人日本経済研究所 入社
- 2009年 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 入社
- 現在に至る